

“（古典的）ディスペンセーション聖書解釈の問題”

－ J E C の福音理解と K B I 神学教育への悪影響を懸念して －



JEC山崎チャペル牧師
関西聖書学院組織神学教師
一宮基督教研究所
安黒務

概略

C.B.バス著「ディスペンセーション主義の背景」より

1. ディスペンセーション主義「聖書解釈」の誤りとは
2. ディスペンセーション主義の「教会論」への悪影響
3. ディスペンセーション主義の「終末論」への悪影響

参考資料

- 岡山英雄著『小羊の王国』「千年王国とイスラエル」 pp.173-200の要点
- 古典的ディスペンセーション主義の卓越した指導者：J. N. ダービー
- ディスペンセーションとは：七つの主なディスペンセーションについて
- グルーデム論稿「教会とイスラエル：古典的→修正→漸進的ディスペンセーション」
- エリクソン著『キリスト教神学』第四巻
 - 「教会と御国・教会とイスラエル・見える教会と見えない教会・教会の始まりの時期」 pp.230-238
 - 「ディスペンセーション主義」 pp.364-368
 - 「再臨の単一性」 pp.398-402
 - 「千年期前再臨説とディスペンセーション主義者」 pp.420-423
 - 「患難期についての見解・大患難前再臨説・大患難後再臨説・問題の解決」 pp.429-437



歴史的教会の信仰からの逸脱としての ディスペンセーション主義「聖書解釈」の誤り

ディスペンセーション主義

1. ディスペンセーションの本質と目的
2. 聖書の（極端な）字義的解釈
3. イスラエルと教会の二分法
4. 教会についての制限された見方
5. 王国のユダヤ的概念
6. 延期された王国
7. 人間に対する神の取り扱いを生み出す律法と恵みの区別
8. 聖書を区分すること
9. 患難前携挙説
10. 大患難の目的
11. キリストの千年王国支配の性質
12. 字義的な「永遠の状態」理解
13. キリスト教界の背教的性質—地上の見える教会と見えない天的教会

福音主義

1. 使徒は旧約と新約は有機的・一体的理解
2. 使徒の聖書解釈の原則のバランス
3. 使徒は霊的・有機的に一体と理解
4. 使徒は旧約と新約の霊的連続性理解
5. 使徒は神の国を普遍的に理解
6. 使徒には延期という考え方はない
7. 使徒には、人間に対する神の取り扱いに差別はない
8. 使徒は聖書を有機的・一体的に理解
9. 使徒は患難後携挙説理解
10. 使徒は教会が患難期を通ると理解
11. ユダヤ的ではなく、普遍的
12. 象徴的描写と理解
13. 見える教会と見えない教会の理解

ディスペンセーション主義の「教会論」への悪影響

ディスペンセーション主義

1. イスラエルと教会の関係
2. イスラエルがイエスの提示された神の国を拒否したため、臨時に、一時的に異邦人に提供
3. 見える地上の教会の腐敗、分離の傾向
4. 教会は天的、患難前に携挙
5. 大患難の預言は、イスラエルに
6. イスラエルに対する旧約の預言は、千年王国時代にすべて成就する
7. 神の国（普遍的）と天の御国（ヤダヤ的）の相違

福音主義

1. 旧新約の神の民の一体性
2. 旧約と新約の霊の神の民は有機的に一体である
3. 見える教会と見えない教会のバランスのとれた考え方、秩序とカリスマの両面
4. 教会は、地上で患難・保護・証し・殉教
5. 大患難の只中で教会は守られる
6. 神の民は有機的に一体、旧約預言は千年王国・新天新地に重ねて言及
7. 神の国は、「神の支配」であり、教会はその表れ



ディスペンセーション主義の「終末論」への悪影響

ディスペンセーション主義

1. 教会は秘密の空中再臨のときに、携挙される
2. 地上に残された神の民はイスラエル民族であり、大患難を通る
3. イスラエルと教会は別個のものである
4. イスラエルが国家として特別な身分に再び置かれる
5. 旧約の預言はどれも教会に関係せず、教会において成就していない
6. 千年王国は、ユダヤ的な王国である。
7. 実際のダビデ王国が再建され、旧約の犠牲までも復活する。

福音主義

1. 教会は大患難の只中で保護され、証しし、殉教をも恐れぬ
2. 民族としてのイスラエルの中にも、大患難の中でリバイバル
3. 救われたユダヤ人は教会に統合
4. 民族としてのイスラエルへの特別な言及は新約にはあまりない
5. 使徒たちは、旧約用語を使用して「新約の教会」を説明
6. 千年王国は、ユダヤ的な王国ではなく、救われたユダヤ人と異邦人による普遍的な王国
7. 再臨はひとつであり、空中再臨・携挙・地上再臨は一体の流れの中にある
8. 新約で、千年王国に対する言及はきわめて少ないので、空想してはいけない



結論

- ディスペンセーション主義は、「歴史的教会の聖書解釈のあり方」からはずれた多くの課題を内包しており、
- その問題が、旧新約の聖書解釈全体に、また特に「教会論」と「終末論」に間違った影響を与えている
- 私たちは、「ディスペンセーション主義」について、神学的な座標軸の中での客観的な位置づけの共通理解を探求し、
- JECという群れにおいて、健全な福音理解を確立していくことが求められているのではないかと
思う



参考資料：古典的ディスペンセーション主義の卓越した指導者

ジョン・ネルスン・ダービー

- Darby, John Nelson. 1800—82年. プリマス・ブレザレンを創設したイギリスの神学者. トリニティ・カレッジ（ダブリン）を優秀な成績で卒業し（1819年）, アイルランド大法院弁護士になる（1822年）. その後アイルランド教会の按手礼を受け, ウィックロー教会の牧師となったが（1826年）, 国教会制度, 教職制に疑問を持ち, 国家と宗教の分離を主張して, 国教会の牧師を辞任した（1827年）. そして, プリマスに赴き, 有志を集めて, プリマス・ブレザレンというグループを組織した（1830年）. 彼らは, 聖書の逐語靈感説を信じ, *ディスペンセーションな聖書解釈を採用し, *千年期前再臨説を主張した. その神学的傾向は, *カルヴァン主義と*敬虔主義の折衷と見られる. 教職制度は否定され, *聖餐は重んじられて, 毎日曜ごとに守られた. 信徒の一体性は強調されたが, キリストの人性や教会の組織に対する論争から分裂を繰り返した. この結果, 彼を中心とする一派はダービー派（Darbyites）と呼ばれている. 彼は*教会の制度的なものを否定して活発な活動を展開, 海外にも宣教活動を広げて大きな感化を及ぼした. 著書も多く, *賛美歌作家・編者としても有名である.

